

# また来たい、と思える博物館に

## —教育博物館 2年目の挑戦—

### 教育博物館

柏谷秀一 白崎徹 松村愛子

教育博物館は、「教育」に特化した全国でも希有の博物館であり、教育関係者に限らず、幅広い年齢層の人たちが興味をもったり親しみを感じてもらえたりする施設として、平成29年4月に開館した。

2年目を迎える本年は、リピーター確保のために行った、本県の教育の歴史や現在の取組みについて興味をもってもらえ、常に新たな発見があるような魅力ある博物館運営について振り返る。

**<キーワード> 教育の今と昔が学べる博物館、貴重な教育遺産の保存、魅力ある博物館運営**

## I はじめに

今年で開館2年目を迎えた教育博物館は、開館からの来館者数が12月末現在で14,500人を超え、来館者からの評価も5段階評価で4.6と、おおむね良い評価を得ている。

今後も人々に親しまれ、来館者がまた来たいと感じられる博物館にするためには、新しい資料や企画を提供しながら、リピーターを増やしていく工夫が不可欠であると考えている。

## II 教育博物館の運営

### 1 資料の調査・研究・保管

#### (1) 学校の調査

開館以来、日常的な業務に加え、企画展や特別展、イベント等が続いたため、資料を調査する余裕が十分ではなかった。今年度の調査は、数校にとどまったが、未調査の鯖江市や越前市の調査を進めることができた。

立待小学校（鯖江市）では、明治末期に撮影された少年野球の写真が新たに発見され、その複製を展示に反映させることができた。明治時代の学校の写真では、卒業生の集合写真や校舎を写した写真などは比較的多く見つけることができるが、子どもたちの活動を写したものは貴重である。今後も可能な限り調査を進め、新資料の発見に努めていきたい。

なお、これらの学校の調査の成果は当館ホームページ中の「学校の宝」で一部を紹介している。

#### (2) 資料を未来に伝える～今年度の調査から

##### ① 旭幼稚園(大野市)

旭幼稚園は、カナダメソジスト宣教師団によって、1919(大正8)年3月に教会に併設されて、開園した。大野市で最初の幼稚園だったが、現在は休園となっている。

同園にはドイツの教育学者フレーベル(1782-1852)の発案した恩物が保管されていた。恩物は、幼児向けの教育玩具であり、木製の積木や板・棒、金属の鑑など20種類から構成されている。基盤の目状に線が引かれた机の上で幼児が遊ぶことにより、想像力や観察力、集中力が身につくようになるとされている。同園から、6種の恩物とそれに準じた教具、机、石盤の寄託を受けた。恩物は、現在も販売されているが、寄託された恩物は、戦前作成されたもので、これまで調査した範囲では初めて目にしたものであった。

## ② 水本学園高等女学校(大野市)

水本学園高等女学校は、1902(明治35)年に創設された水本裁縫女学校がその始まりである。創設者水本ふさは、まだ女子教育への関心が低かった時代に裁縫や礼儀作法、一般教養を身につけた家庭婦人を育てることを目指していた。

同校からは足踏み式のミシンなど、和洋裁に関連する教具や教科書、学校日誌、制服等の寄贈を受けた。なお、大正時代に建築された校舎は、現在も保存され、一部改装して他の用途で使用されている。

残された資料を引き継ぐ園や学校がない場合、貴重な資料が廃棄されるおそれはきわめて高い。今後も廃校となる学校等に残された資料の調査を進め、学校資料の散逸を防ぐことに努めたい。

## (3) 資料の研究と展示への反映

福井ゆかりの教育関係者については、「学びの歴史廊下」および「展示室B」で人物の紹介や関連する資料の展示を行っている。今年度は新たに日下部太郎を取り上げ、展示に反映させた。

日下部太郎(1845-1870)

福井藩出身。福井藩校明道館で学んだ後、長崎へ遊学した。その後日本初の公式留学生の一人として渡米、ラトガーズ大学に学んだ。同大学のグラマースクールでは、グリフィスからラテン語の個人レッスンを受けた。勉学に努め、優秀な成績を修めながらも病気のため1870(明治3)年、26歳の若さで死去。

大学在学中の唯一残存していた書簡は1985(昭和60)年、日米友好の証としてラトガーズ大学から福井市に寄贈され、現在は福井市立郷土歴史博物館が保管している。

その書簡は、1869年7月9日付けで、寄宿先のヴァン・アースデール夫人にあてたものである。2年次を修了した後、静養を兼ねて訪れた五大湖周辺やカナダのモンリオールなどで楽しい時間を過ごした様子が英文で記されている。

春季企画展では現資料を借用し、訳文と地図とともに展示して日下部の夏休みの行程をたどった。

《参考文献》高木不二(2015)『幕末維新期の米国留学 横井左平太の海軍修学』慶応義塾大学出版会

## (4) 教科書の保管状況

今年度は、個人からの寄贈や古書店からの購入等により、昭和20年代の小中学校の教科書や、戦前の中学校、高等女学校といった上級学校の教科書が増えた。昨年度未整理であった平成期の高校教科書のデータ化も終了し、昭和24年に手作りで描かれた貴重な教科書も含め、当館の蔵書は、約13,000点となった。しかし、現在でも昭和40年代の小中学校教科書や昭和20年代の高校の教科書が少ない状況にある。教科書閲覧室をさらに充実した場所にできるよう、今後も様々な機会を通して資料を収集していることを周知していきたい。

## 2 展示などの教育活動

### (1) 常設展示の更新

当館では、新たに寄せられた資料や企画展のために作成した資料などを、常設展示の資料として追加・更新している。リピーターとして来館された方が飽きることなく、常設展示においても新たな発見ができるよう、今後も随時展示内容の見直しを図っていく。今年度行った主な常設展示の更新は以下の通りである。

#### ① 展示室A(教育の歴史)

明治初めの近代教育を紹介した企画展示の中から、木重鈴を用いた重鈴体操に関する資料(掛図・福井市豊小の記録)を常設に追加したり、当時日本一と賞された西洋式建築の龍翔小学校(現三国南小学校)の模型を、借用期間を延長して展示を継続したりしている。また、ものの名前などを教えるた

めに用いた掛図(「単語図」明治7年)は、タペストリーに複写し、気軽に「触れて見る」ことができるようにして廊下に展示している。(図1)

福井地震(昭和23年)に関する特集展示の中からは、学校日誌の震災の記録と被災学校の様子を撮影した写真資料の一部を、戦後まもなくの様子を紹介するコーナーで展示している。

② 展示室B(福井ゆかりの教育者)

明治期の国語教科書の監修や文部省唱歌の校閲にあたった本県出身の芳賀矢一について、昨年度、孫にあたる方から様々な資料提供を受け、それらを元に特集展示を行った。そうした資料の中から実際に本人が身につけていたもの(眼鏡・懐中時計)などを常設展示に残し、身近に先人を感じてもらえる内容にしている。(図2)

③ 展示室C(教科書の歴史)

昭和24年当時、教科書が子ども達に十分行き渡らなかった頃、父親が手作りで教科書の複製を作成し子どもに持たせた「手作り教科書」の寄贈を受けた。当時の物資不足の状況の中でも、親の愛情が子どもを支えたことを如実に物語る貴重な資料を常設展示に加えた。(図3)

また、他の寄贈資料の中には、戦後初めて発行(昭和29年)された地図帳があった。まだマスメディアが十分発達していない時代に、諸外国の地勢を子どもがイメージできるように美しいカラーのパノラマ図が描かれていた。(図4) この資料は全国でも数点しか確認されておらず、その点でも貴重な資料である。

④ 展示室D(なつかしの学び舎)

大野市の元水本学園高等女学校の「足踏みミシン」を展示室Dの常設展示に加えた。年配の方には懐かしく、子ども達にとっては初めて見る資料が加わることで、室内の充実感を増すことができた。

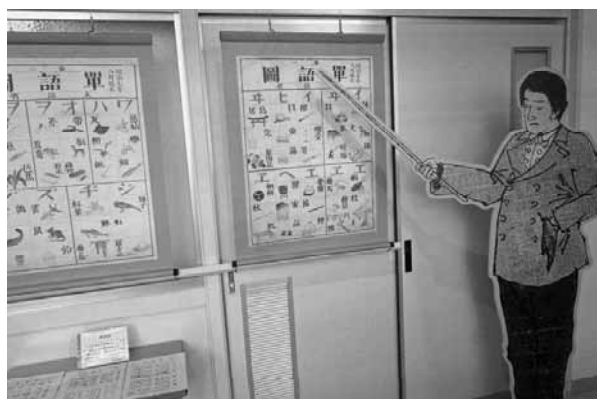


図1 掛図の複製



図2 先人を身近に感じる資料



図3 手作り教科書



図4 昭和29年の地図帳

## (2) 企画・特集展示

展示事業においては、先にも述べたように随時常設展示を更新し、内容の充実を図っている。これに加えて、期間を限定し、テーマを設定した企画展示・特集展示も行っている。これらの展示はテーマに沿った内容を掘り下げて紹介していくことができる。また、常設展示は、基本的に自館の所蔵資料を中心に展開するのに対し、企画・特集展示は、期間を限定して開催し、普段見られないような貴重資料を他館から借用することもあり、当館の存在をアピールする手段ともなり得るものである。

今年度は明治維新から150年に当たる年であり、福井県では「幕末明治福井150年博事業」と称して県・市町の博物館・資料館において関連する展示を行った。

当館でもそれに合わせた2つの企画展と、福井震災関連の特別展示を行った。以下に展示の概要を記す。

### ① 企画展「幕末明治福井の教育 ―藩校の教育改革―」

平成30年4月14日(土)～6月3日(日)開催

#### ◇展示の概要

江戸時代の後半、財政難に見舞われるようになった多くの藩では、18世紀後半から19世紀にかけてさまざまな改革がおこなわれた。福井の各藩でも藩政改革が行われ、教育による人材の育成を目指し、武士の子弟が学ぶ藩校の充実や改革が実行された。特に企画展で取り上げた福井藩と大野藩の藩校では、洋学が積極的に導入され、幕末にめざましい成果をもたらした。また、藩校で学んだ人々は、のちに明治政府や地方の政治・教育の中心を担う役割を果たした。

福井藩からは日下部太郎など、海外へ留学するものもあらわれた。日下部は留学中に病死したため、留学の成果を持ち帰ることはできなかったが、日下部を指導したグリフィスが来日し、その指導を受けた藩士たちは廃藩置県後、各方面で活躍することになった。

#### ◇展示解説1 <幕末の大野藩と洋学の導入>

大野藩では、大坂の適塾で塾頭を務めた伊藤慎蔵を招聘し、洋学館を開設した。藩内外から入学希望者が集まり、兵学・航海術・辞書などの翻訳や出版が行われ、洋学研究に大きな役割を果たした。さらに、幕末に大野藩が行った樺太開拓の試みや大野丸の建造にも影響を与えた。

ここでは大野藩校明倫館が所蔵していた洋書や、日本で翻訳・出版された詳細なオランダの地図などを展示した。

#### ◇展示解説2 <橋本左内と明道館の改革>

幕末の福井藩主松平慶永は、1855(安政2)年、人材育成のため藩校明道館を設立した。翌年には江戸での洋学研究を終えた橋本左内を明道館幹事に、さらに1857(安政4)年には学監同様心得(現在でいう校長にあたる)に任命した。左内は、欧米の自然科学や兵学を学ぶ洋書習学所を設立するとともに、他国修行を希望する藩士に対し、手当金を支給する制度を提案した。この制度は、廃藩まで継続しており、身分の低い藩士にも進んだ学問の習得や、優れた人物との交流の機会を提供することになった。

#### ◇展示解説3 <福井藩の他国修行>

明治維新後の1868(明治元)年、徳川氏によって創設された沼津兵学校(現在の静岡県沼津市)は、当時日本で最先端の数学を教えていた。全国から資業生(留学生)が集まったが、福井藩からは全国で最も多い15名が沼津で学んだ。

ここでは兵学校で出版された筆算教科書や、生徒の図画ノート、留学生で唯一福井に残り活躍した若代漣蔵(わかしろれんぞう)の数学ノート(現在高校で学ぶ対数の記述もある)などを展示した。(図5)

#### ◇展示解説4<グリフィスの来日>

ラトガーズ大学で日下部太郎を指導したことが縁となり、福井藩校明新館に理化学教師として赴任したのがグリフィスである。福井でのグリフィスは、契約した理化学以外でも、夜間に政治や歴史などについて教えるなど、積極的に藩士への指導を行った。契約期間は3年であったが、廃藩置県によりわずか10か月で福井を離れることになった。しかし、福井在住時、東京府知事に就任した由利公正に師範学校の創設を提案したり、東京では日本人向けの英語教科書を著したりするなど、真摯に日本の教育の将来を考えていたことがうかがえる。

ここではグリフィスの書簡と著作した英語教科書を展示するとともに、教科書の複製を展示ケースの前に置き、来館者が手に取って中身を見られるようにした。(図6)



図5 福井藩の他国修行



図6 グリフィス著作の英語教科書(手前)

#### ◇展示を終えて

今回は幕末期の展示ということで、歴史系の博物館とどのように差別化を図るかに頭を悩ませることになった。

また、従来から常設展示でも指摘されていたことではあるが、教育史にさほど興味がない人には、展示内容が難しいと感じられたようであった。しかしながら、実際に職員が展示説明を行うと、来館者からは、政治活動以外の左内のことが分かって勉強になったとか、グリフィスの福井や日本を思う気持ちがうかがえたといった反応があった。

今回の企画展で、一般にはあまり知られていなかった、橋本左内やグリフィスの教育に関する功績を発信することができたと感じている。

#### ② 特集展示「福井震災と学校～福井震災と向き合う昔・今」

平成30年6月16日(土)～7月8日(日)開催

#### ◇展示の概要

今年は、福井地震から70年の節目の年にあたる。体験者も高齢となり、忘れ去られていく震災の記憶をつなぎとめるため開催に至った。教育博物館という特色を生かし、昨年同様、震災当時の「学校」に焦点をあてて展示を行った。

テーマは大きく2つある。一つ目は、震災当時の実物資料を展示し、当時の状況を伝えるとともに、70年経った現在の人々が福井地震と向き合って作成した防災マップや紙芝居等の実物資料を展示することである。

2つ目は、年史等に残された記述をもとに、震災後の学校の動きや、当時寄せられた多くの支援を紹介することである。3,700人以上の死者がでて、多くの家屋が倒壊した中でも、必死に前を向いて学びを取り戻そうと尽力した地域の人々や学校関係者、悲惨な環境でも懸命に学んだ当時の子ども達の強さを、様々な資料を通して感じ取ってもらいたいという思いのもと開催した。

#### ◇展示を終えて

今年は70年の節目の年ということもあり、メディアにも多数取り上げられた。その効果もあり、昨年度より来館者や問い合わせも多かった。地震後70年という月日に、地震の記憶の風化が間違いなく進んでいる。今回の展示を開催するにあたり、参照するための資料を探してみると、驚くほど多くの書籍が残されていた。震災から10年、30年、50年とその都度その都度当時の人たちは、記憶の風化を恐れ、次世代の人々に多くの事実を残してきている。しかし、その書籍の存在すら忘れ去られ、人目のつかない所に保管されているものも多かった。今回展示した体験談は、今まで残されてきた数々の書籍から引用したものである。それらを読むことで、来館者に、当時の状況を生々しく伝えられたとともに、今後の生活に活かせる何かを提示することができた。

また、今回の展示では、石川県能美市「いきいきサロン弁慶の里」をはじめ、福井市の防災センターや平章小学校(坂井市)、細呂木小学校(あわら市)など、多くの団体・学校にご協力頂いた。それによって、紙芝居やDVD、防災マップなど、それぞれの地域や学校での取り組みを、実物資料とともに提示できたことも、福井地震について多方面からアプローチできたという点で、意義があったと考えている。

70年という節目を終えて、当面は、特集を組んで展示を行う予定はないが、教育博物館として、今回収集した資料を今後の常設展示の中に活かしていくことで、地震の記憶を後世に伝えられるよう、工夫していきたい。

#### ③ 企画展「幕末明治福井の教育 ―近代教育のはじまり―

平成30年9月15日(土)～11月11日(日)開催

#### ◇展示の概要

この企画展は、春に行った企画展の続編にあたる。学制公布から明治時代前半の教育に焦点を当て、国家の近代化を進める一環としての教育の変化を中心に展示を展開したものである。

江戸時代の寺子屋は、個別指導で、「読み・書き・そろばん」といわれるように、庶民にとって実用性が高い教育であった。それに対して、明治の学制による小学校は、欧米の教育をそのまま日本に当てはめようとしたものであった。子どもの実態に合わない高度な内容や、欧米の教科書を翻訳した教科書が用いられ、さらに授業料が徴収される学校へ通うことは、庶民にとって大きな負担となった。そのため行政から強い指導があっても就学率はなかなか上昇せず、特に女子の就学率は、非常に低かった。学制で理想とされた国民皆学、すなわち小学校の義務教育が実現するまでには30年近くの年月が必要だったのである。

展示では明治政府が欧米に肩を並べるために、大きな混乱をへながらも教育制度の定着に取り組んだ様子を約90点の展示資料で振り返った。また、明治20年代に発行された新聞記事から、現在も行われている学校行事の始まりについて紹介した。

#### ◇展示解説1 <国民皆学へのあゆみ>

1872(明治5)年に学制が公布され、国民皆学がうたわれた。しかし現実には、従来寺子屋で学んでいた庶民の多くは、小学校へ子供を入学させる必要性は低いと考えた。わずかな負担で必要な知識を習得できた寺子屋と違い、高額の授業料を納めてまで実生活とかけ離れた知識を習得する学校へ就学させる庶民は少なかったのである。特に女子については、学校よりも子守や裁縫など家事労働が優先されていたようである。1877(明治10)年11月の尽誠小学校(鯖江市豊小学校の前身)の出席一覧を見ると、1年生に当たる第8級に属する28名の女子のうち、23名は1日も出席していない。

就学率は、その後なかなか上昇せず、授業料が無償化された1900(明治33)年に就学率が急上昇し、ようやく90%に達した。このことから経済的な負担の大きさが裏付けられる。

◇展示解説2 <明治初年の教科書・掛図>

学制公布の時点では、教科書を発行する準備が整っておらず、同年出された「小学教則」では、教科書として使用する書籍の例として、民間で発行されていた啓蒙書や翻訳書が示されていた。(図7)

これらは児童の発達に対して内容が高度すぎ、新しい学校に対する不満を高める大きな原因となった。そこで文部省直轄の師範学校は、『小学入門』『小学読本』『小学算術書』など、欧米の教科書を範とした教科別の系統的な教科書を編さんし、近代教科書の基礎を築いた。文部省は各府県にこれらを翻刻する許可を与え、普及を促進した。

《引用》 筑波大学付属図書館特別展『明治のいぶき』 黎明期の近代教育—幻灯・錦絵・教科書—  
紹介HPより要約引用

寺子屋の個別指導から一斉指導に変わった小学校では、掛図が用いられた。1年生では、「いろは」「五十音」の次に単語図、連語図などで歴史的仮名遣いや、ものの名前、用途などを学んだ。(図8)単語は、漢字で書かれているため、小学1年生には読むことが難しく、挿絵でものの名前を理解したようである。



図7 明治時代に用いられた教科書



図8 掛図(単語図と連語図)

◇展示解説3 <学校行事のはじまり>

現在も盛んに行われている学校行事の中には、明治時代に始まったものもある。この展示では、当時の新聞記事にみられる遠足と運動会について取り上げた。

初期の運動会は、「遠行(えんこう)運動」とも呼ばれ、野山にでかけてさまざまな競技を行うもので、遠行運動には遠足の要素も含まれていた。

明治前半の小学校には、広い運動場がほとんどなかったため、生徒が弁当を持ち、隊列を作って河原や野原、海辺まで行進して運動会を行った。後には、娯楽的な要素が加わるとともに学校対抗の運動会も開かれるようになり、多くの保護者も参観に訪れるようになった。1888(明治21)年の『福井新報』には、4回にわたって福井市街小学校生徒大運動会の様子が掲載されている。

また、翌年には川西地区3校の連合運動会が三里浜で行われ、新聞記事を基に行進した行程を推定すると、往復10数kmに及んでいることがわかった。(図9)

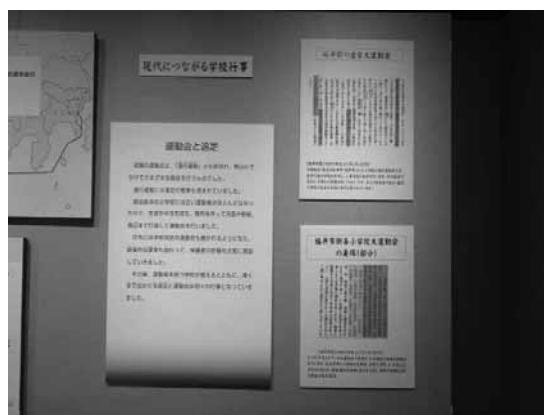


図9 当時の新聞記事(右2点)

#### ◇展示を終えて

この企画展の期間中に天皇皇后両陛下のご視察が組み込まれたため、会期の前半は、一部春季企画展の展示資料を含めた構成となった。また、同じ展示室の中で常設展示の資料を残したまま企画展を行ったため、両者の接続には工夫が必要だった。しかし、このことによって江戸時代の教育と明治以降の近代教育との比較、国民皆学をうたった近代教育の理想と現実の乖離、特に急激な近代化を進めようとした明治初年の教育の現実を映し出すことができたのではないかと考える。

#### ④ 天皇皇后両陛下の教育博物館ご視察

平成30年9月28日(金)

福井国体開会式の前日に、両陛下が来県され、行幸啓として当館をご視察された。ご覧いただいた展示資料は、以下の通りである。

#### ◇展示室A 「福井の教育の歴史」および企画展示

福井藩校明道館で用いられた、現在の辞書にあたる『三語便覧』、グリフィスの著した、日本人向けの英語教科書『THE NEW JAPAN FIRST READER』、アメリカの小学校で用いられた、『THE FIRST READER OF THE SCHOOL AND FAMILY SERIES』および一部にその翻訳を取り入れた『小学読本』、30年以上前に廃校となった旧上根来小学校で収集した木製の垂鈴などをご覧いただいた。(図10)

#### ◇展示室C 「教科書の歴史」

両陛下が小学校で学ばれた国語・音楽(唱歌)の教科書をご覧いただいた。

両陛下は1歳違いであり、入学時の教科書が異なる。天皇陛下が尋常小学国語(サクラ読本)の書き出しから、次のページの文章までも覚えていらっしゃることに驚かされた。国民学校6年の単元「雲のさまざま」と「燕岳に登る」についてもよくご存じであった。前者では雲の名称について、後者では文章中の「そうしかんば」が「ダケカンバ」のことであると、皇后陛下に楽しげに語られていた。この他、唱歌の教科書もご覧になり、「日の丸」「春の小川」など、現在も教科書に掲載されている曲の歌詞が変わっていることなどに興味をもたれたご様子だった。(図11)



図10 展示室Aでの様子

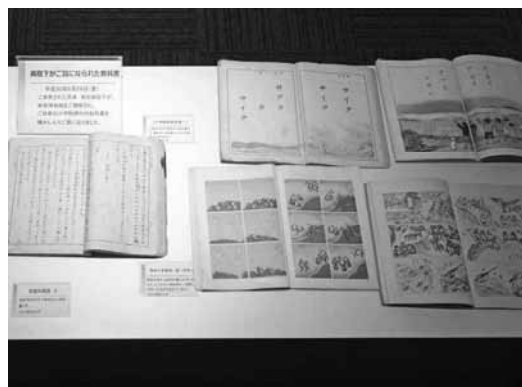


図11 展示室C ご覧になった教科書類

#### (3) イベント・講座の運営

当館では企画展や特集展示以外に、より多くの人に向けて当館の存在を周知することと、当館に親しみをもってもらうことをねらいとし、イベントや講座を開催している。ゴールデンウィークや夏休み、冬休みといった連休期間を中心に開催し、内容も子どもから大人まで広い層で楽しんでもらえるよう企画している。以下は今年度行った主なイベント・講座の概要である。



① 開館1周年記念「コカリナコンサート」(開催日：4月15日)

昨年度、好評だった「ふくいコカリナアンサンブル」メンバーを招いてのコンサートを、開館1周年記念イベントとして開催した。木の優しさが伝わるコカリナの音色とともに、懐かしい曲や子どもでも知っている曲の演奏、コカリナという楽器の特長のわかりやすい解説など、工夫された内容により、誰もが楽しめる時間となった。展示室D「なつかしの学び舎」で実施することで参加者は教室での授業の雰囲気を感じながら味わった。じっくりと曲に聴き入っている参加者の様子から、大変充実した時間となったと感じられた。昨年度のイベントにも参加された方が今回も訪れ、コカリナの魅力とともに当館の周知が進んでいることも感じる事ができた。



図12 コンサートの様子

② 「～懐かしの唱歌と童謡～リードオルガンで歌う会」(開催日：8月19日/12月23日)

夏休み期間と冬休み期間にそれぞれ1日各2回ずつ行った。唱歌や童謡には季節感のある曲が多く、それぞれの時季に合わせた曲を紹介、当館の常設展示にもなっているリードオルガン(足踏みオルガン)を演奏しながら参加者とともに歌や手遊びを楽しんだ。誰でも参加できるイベントだったが、高齢の方や親子が多かった。このイベントは、高齢の方々が気軽に集い、気兼ねなく歌を歌い、昔を思い出して語らえる場所でもあり、若い親が幼い子どもに本格的に唱歌や童謡を聴かせられる場所でもあるということを変更確認することができた。(図12)

③ 「16ミリフィルム映画上映会」(開催日：学校の長期休業にあわせて年間7日実施)

県映像ライブラリー、若狭図書学習センターから機材やフィルムを借用して上映した。16ミリフィルム映写機は、年配の方には懐かしく、子ども達にとっては、初めて見る機械で、興味をもって視聴していた。夏には絵本作家かこさとしの作品「だるまちゃんシリーズ」特集と夏の「お化け」特集、冬は国語の授業でも読んだことのある「大造じいさんとガン」や、「わらぐつの中の神様」といった物語を「教科書の名作」特集として紹介するなど、テーマを設定して上映会を行った。特に夏の「だるまちゃんシリーズ」特集では、たいへん多くの幼児連れの親子が参加し、かこさとしの絵本の人気の高さがうかがえた。

④ 「謎解きクイズラリー」(開催日：8月10日～12日)

昨今「脳トレ」や「謎解き」を扱ったテレビ番組が多く、子ども達もこうした頭の体操は喜んで取り組む。このイベントでは、館内に展示資料に関する問題を配したクイズラリーを行った。参加者は、博物館の展示物に関するクイズと、次のクイズが置かれている場所の暗号を解読しながら進む。全て解き終わると最後の「合い言葉」にたどり着く。楽しみながら展示に触れられるというのがねらいである。暗号やクイズを準備するには苦心したが、3日間の開催で120名を超える申し込みがあり、どの方々にも楽しんで参加してもらえた。次回開催を期待する子ども達の声ももらったのが今後の励みになった。

⑤ 小学生英語体験「FEEL AMERICA!」(開催日：8月5日)

今年度初めて研究所内の英語教育グループと連携したイベントを開催した。英語が本格的に小学校高学年で教科化されることを受け、英語に楽しく触れる機会を提供したいと考え、企画を進めた。福井県ゆかりの先人グリフィスを紹介するお芝居・アメリカに関するクイズやゲーム・英語の書道「カリグラフィー」体験など、内容の濃い、かつ楽しめる講座を、英語教育グループが工夫して準備した。事前申し込み制で15名程度の募集だったが、すぐに定員を満了したことからも、英語学習への関心の高さがうかがわれた。(図13)



図13 講座の様子

⑥ 冬休み工作体験「モザイクタイル」(開催日：12月23/26/27日)

「ものづくり」は、子どもがとても喜ぶ活動である。昨年度はクリスマスリース作りを行ったが、今年は「モザイクタイル」で描く工作イベントを企画した。モザイクタイルはプラスチック製で手で簡単に割ることができる。14色のタイルを好きな形に割り、板にボンドで貼り付けながら描いていく工作である。15cm四方の、さほど大きくはない作品サイズではあるが、隙間がないように丁寧に作業すると1時間以上はかかり、根気を必要とする。しかし、どの親子



図14 工作体験の様子

もじっくりと時間を掛け、丁寧に作業をやり終え、実に満足そうに作品を持ち帰られた。子どもの「これ難しいよ」という発言に対し、親の「難しいから面白いんだよ」というやりとりが印象的だった。

(図14)

以上イベント・講座の運営では、子どもから年配の方までが楽しんでもらえる内容を工夫してきた。その結果、年末時点で500名を超える参加を得ることができた。教育総合研究所にある博物館という、他の施設にはない環境を生かし、今後も所内様々な教科等専門のスタッフと連携を図りながらイベント・講座の企画を行っていきたい。

(4) 館内掲示の工夫

本館は、来館者の方々に「教育への親しみ」や「愛着」を感じて貰える博物館となることをコンセプトの一つに掲げている。よって、堅苦しさを少しでも取り除き、気軽に語り合えるような場をつくることに努めている。ここでは、その取り組みについて述べる。

① エントランス黒板の工夫

エントランス黒板とは、正面入り口入ってすぐの左手にある黒板をさす。入館して最初に目につく所であるため、館の雰囲気を印象づける場所でもあると考えている。エントランス黒板を描く上では、次の点に配慮している。

- ・色遣いや字体に注意し、柔らかい雰囲気をだすこと。
- ・季節感を出すとともに、企画展等を開催している場合は、関連する内容を考慮すること。

- ・提示する内容の時代が偏らないこと。

この点を考慮した上で、県内学校の校舎写真の提示や、明治の夏休みの宿題の紹介、企画展の内容に合わせて、明治の体育祭の紹介、今年度来館した方々の写真の提示等を行ってきた。今後も様々な視点から考え、来館者の話題の一つとなるように工夫していく。

## ② 廊下展示の工夫

本館は、学校を再利用した校舎であるため、廊下は学校の様相をそのまま残している。それが良い点でもあるのだが、多少殺風景な印象もある。そのため、廊下の展示にも以下のような工夫を凝らしている。

### ◇「季節を感じさせる作品」の展示

各季節毎にテーマを絞って、明治から現在までの教科書の中からそのテーマに沿った作品を紹介している。その時代ならではの発想や価値観がみられるものもあれば、時代が変わっても親しまれ続けている作品もある。

### ◇「ものしり事典」の紹介

展示室D横の掲示版で、各月ごとに、その季節の催事の紹介や、節気まつわりの話、雑学等を紹介している。掲示版の飾り付けも季節感を感じられるようなものにその都度更新している。

例)「もみじとかえでのちがい」「神無月という名称の由来」など

### ◇言葉に関するクイズの提示

「間違いやすい言葉ランキング」や「難読漢字」等、言葉に関するクイズコーナーを設けている。足を止めて一つ一つのクイズに挑戦していたり、紙に書いて帰る来館者も多く、多くの方々の興味を惹いている。

例)「偶に」「一入」の読みは?、「他力本願」「姑息」の正しい意味は? など

## Ⅲ 省察・現状分析

### 1 研修・視察の受け入れ状況

本年度(4月～12月)の研修・視察の依頼は53件であった(正式依頼のみ)。細かい内訳は以下の通りである。参考までに昨年度の結果も提示する。

|     | 視 察<br>【国外・県外】 | 視察・研修<br>【県内】 | 学校活動 | 公民館・地域 | 福祉施設等 | 合計 |
|-----|----------------|---------------|------|--------|-------|----|
| H29 | 10             | 14            | 12   | 1      | 15    | 52 |
| H30 | 17             | 6             | 4    | 17     | 9     | 53 |

昨年度と比べると、表の通り、国外や県外からの視察と公民館等による社会教育の一環での来館者が増え、県内からの視察や研修、そして学校活動での来館が減った。国外・県外の視察に関しては、和歌山県のような地方からの来館者が増えたことが大きい。また、今年は地域の老人クラブ等からの申し込みが昨年に比べて大幅に増えたことが来館者増の要因である。一方で、学校活動の申し込みは大幅に減

った。これは、国体の影響で、秋の校外学習の時期のバスの確保が、各学校とも難しかったことが考えられる。

## 2 来館者の反応(アンケート調査より)

12月末の時点で、来館者7,003人でアンケート総数は1,323枚となっている。このアンケートをもとにした分析は、以下の通りである。

### (1) 来館者の満足度(5段階評価)

| 展示室A | 展示室B | 展示室C | 展示室D | 展示室E | 総合  |
|------|------|------|------|------|-----|
| 4.6  | 4.4  | 4.6  | 4.8  | 4.7  | 4.6 |

展示室A「教育福井の歴史」 展示室B「ふくいゆかりの教育者」 展示室C「教科書の歴史」  
展示室D「なつかしの学び舎」 展示室E「福井の教育」

### (2) 主な感想・要望

- ・全国トップクラスの福井の教育の「厚み」がよくわかった。
- ・昔の学校の様子を知り、今までは「学校めんどくさいなあ」と思っていたが、学校の有り難みが知れて良かったと思うから、こういう施設は大切だと思った。
- ・教育学部で来年教員採用試験を受けるので、この経験を活かしたらと思う。
- ・とても貴重な資料が多々あり、考えさせられる時間だった。
- ・福井にいながら知らないことが沢山あるので、見ていて面白いし感心する。
- ・今の時代とあまり変わらない部分と大きく変わった部分があって、見ていて飽きなかった。
- ・福井の教員として自信がもてた。
- ・研修の度に立ち寄るのが楽しみ。展示が工夫されていて勉強になる。
- ・子ども達にとって身近でいつの間にか学び、気がつける場所となる可能性を感じた。
- ・卒業後数十年して「思い出の施設・記録」を見られることは有意義なことだと思う。
- ・教科書がかなりそろっているので満足した。
- ・保存状態がとてもよいものばかりで何でも捨てればよいなんてと考えさせられた。
- ・親子で昔と今の違い等を楽しむことができた。
- ・学校ではあまり習わないようなことが学べて良かった。
- ・イベントが楽しいのでもっとやって欲しい。
- ・写真をもっと増やして欲しい。

(1)(2)から、来館者の満足度は高く、それは感想からも伝わってくる。昨年度の評価は総合で4.4であったことを考慮すると、今年は来館者の方から昨年以上の満足度を得たと言える。要望の方を目をやると、常設展示においても、イベントにおいても更なる充実を来館者は望んでいることがわかる。実際に使用していた教育資料というのは、お金を出せば充実させられるというものでもなく、県民の方々からの情報提供や寄贈を呼びかけることで充実させられるものであるため、時間はかかると思われるが、地道に行っていきたいと考えている。

## 3 博物館運営委員会

当館では、利用者からの意見を館の運営に反映するとともに、今後の利用水準の向上と、さらなる利用促進の方策を模索することを目的に、学識経験者、近隣の小中学校長、利用者代表、類似施設職員の8名で構成された博物館運営委員会を設けている。今年度は、7月6日に第1回委員会が開催された。その中で、委員から出された意見としては次のようなものがあった。

### (1) 他施設・団体との連携についての意見

現在、様々な施設があり、またそれぞれに特色ある展示や企画を行っている。それぞれがばらばら

に行うのではなく、互いの持ち味を共有するなどの連携を行っていくと相乗効果もあり、当館の認知度も上がると思われる。近いところではエンゼルランドとの連携を図るとよい。

地域コミュニティの中心として各地区の公民館・コミュニティセンターがあり、そこでも子どもからお年寄りまで様々な年齢層が利用している。こうした施設とも連携を図り、その地域にまつわる歴史や資料を取り上げていくとよい。

いろいろな団体が、行事や式典などで広い場所を求めている。研究所は100人以上収容できる場所があるので、様々な団体に利用してもらい、当館にも立ち寄る機会を増やしてはどうか。

## (2) 展示内容についての意見

様々な企画や特集を行いながら、その成果を常設展示の更新につなげていくことはとてもよい。リピーターが来館するたびに新しい発見ができることが好ましい。

「教育者側からの学校」の展示ではなく、「体験者としての学校」の展示である方が一般に興味関心を引く内容になる。「遠足」や「運動会」、「給食」など、皆が身近に経験している事柄を扱うことで、来館者は親しみをもって展示内容に触れられると思われる。

見るだけでなく、実際に触れられる展示を継続していくとよい。貴重な実物も見応えはあるが、レプリカやタペストリーなど複製にすることによって気軽に「触れられる」展示ができる。

(年間の計画から)内容が、親子などの若い世代をターゲットにしたものが少ない。たとえば夏休みなどにあわせて、思い切って子ども向けの内容や遊びの要素を取り入れた展示を行ってもよい。

## (3) 広報・イベント内容についての意見

イベントチラシなどは、どれだけそのチラシに興味をもち、家に持ち帰るかが大事で、もっと写真やイラストなどを多用して、子どもが「面白そう」と直感的に感じてもらえるデザインにすべき。

小学生の親は、今英語に関心をもっていると思われるので、夏のイベントで小学生向けの英語講座を行うのは有効だと思われる。

所在地が元「春江工業高」というのと、運動公園にあった「研究所」が移転したというイメージが強いので、ここに博物館がある、という認知度はまだ低いのではないか。

## (4) 提言を受けて

(1)については今年度、研究所の「サイエンスラボ」と、エンゼルランドが協力しながら子どもたち向けのイベントや講座を進めており、その関係で来所した親子が博物館にも立ち寄るという相乗効果が表れてきている。また公民館へは、周知に努めたことで公民館主催の研修にも当館が加えられる機会が増えている。(2)については、秋の企画展の中で遠足や運動会をテーマにした展示を取り入れ、多くの方に関心をもって見て頂くことができた。また企画展で借用した資料を元にタペストリーを作成し、気軽に触れられる資料展示を現在も廊下で行っている。(3)について、子ども向けのチラシなどは、さらに興味がわくような親しみやすいデザインを今後も工夫していく。

以上のように、運営委員の方々から頂いた意見を取り入れながら、多くの人に親しまれる館の運営を目指していきたい。

## V まとめ 今後に向けて

ここまで、博物館の運営内容を中心に、開館2年目の取組みを振り返ってきた。

全体を見ると、来館者アンケートからは、昨年よりも良い評価を得ており、運営委員会からも展示の充実には一定の評価を得ている。その一方、今後の課題として次のような点に取り組む必要があると考えられる。

### (1) 知名度の向上

アンケートを見ると、今年度は家族や友人を通して当館に足を運んだ来館者の割合が増えている。また、行幸啓や福井地震70年という節目の年を迎えたこともあり、新聞やテレビなどで取り上げられ

る機会が増え、県外にも少しずつ知名度が上がっていると感じる。しかし、アンケートの自由記述欄には「もっとPRを」という声も多く、まだ館としてのPRが不十分であることは否定できない。

(2) 展示の充実

アンケートの自由意見や来館者からの聞き取りでは、「もっと体験できるものを増やして欲しい」「学校の写真をもっと増やして欲しい」「自身の出身校のものが寂しい」といった要望が多数あった。

今年度は一般の方々から寄贈の申し出を受ける機会も増えてきた。寄贈資料の中には廃校になった学校のものも多く、貴重な資料もみられる。今後も研究をすすめ、展示の充実に努めていきたい。

また、企画展や特集展示の成果を常設展示に取り込むことによって、訪れるたびに新しい発見がある博物館を目指していきたい。

この2年間の取組みを通して、まずは館の知名度を向上させることの大切さを感じたが、それとともに、初回に満足した来館者が、再び足を運びたいと感じる博物館を目指すことも、重要な課題だと認識している。これからも、イベントや企画展を充実させるとともに、本県の教育の歴史や先人の功績の発掘など、様々な教育遺産について調査・研究を進め、今まで以上に福井の教育の歴史に親しみを感じ、興味・関心をもてるような博物館となるよう、努力と工夫を重ねていきたい。